県内屈指の進学校である宮崎県立宮崎大宮高校へ新卒での赴任が決まったときは、不安よりも自信の方が大きかったんです。オーラル指導を重視する同校なら留学経験が生かせるし、生徒も若い自分を好意的に迎えてくれるはず。だから着任直後、同じ英語科の谷山達博先生が私を食事に誘い、「宮崎大宮ならではの指導を理解すること。ただし指導では3割は自分の色を出しなさい」と話してくれたときも、それがどういうことなのか、本質的なことは分かりませんでした。「柳井さんが教えるクラスとは、定期考査の平均点で10点差をつけるから覚悟しなさい」と言われたときも、「そんなに差がつくわけがない」と高を括っていました。

しかし、始業後1週間もすると、私は生徒の反応が芳しくないことに気が付きました。「勉強してきなさい」と言えば生徒は従うものだと思っていたのにしてこない。自信のあったオーラルでも、英語が話せることと英語を教えることは別物だと思い知らされました。

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

挫折した私を変わらず褒め続け、「教師」にしてくれた

宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二 YANAI KENJI

生徒がそうであるように、
教師も失敗からこそ多くを学ぶ。
だが、失敗経験は、誰にとっても苦く、悲しく、厳しい。
心温かな先達の存在があってこそ、
失敗を成長の糧に出来るのだ。
宮崎県立延岡星雲高校の柳井健二先生が
苦渋の中での恩師との出会いと、大きな成長を振り返る。

「これではダメだ」と思いながら、私はほかの先生に相談することが出来ませんでした。プライドが邪魔をしていたのです。4月末、教育委員会への報告書に指導教員から「未だ学生気分」と書かれる始末。さらに、教育実習生が最後の実習を終えた日、ある生徒から「柳井先生はいつ大学に戻るの?」と嫌みを言われました。生徒との関係づくりもうまくいかず、教師を辞めるしかないのかも、と思いました。

5月のPTA総会のとき、保護者に紛れて初めてベテランの先生の授業を見に行きました。授業のリズム、発問の仕方など、すべてが違いました。すぐに自分でも真似をしてみましたが、やはりうまくいきません。そこで、授業が始まってからもずっと「調子はどうだ?」と親しく声を掛けてくれていた谷山先生に、私は意を決して授業に関する疑問をぶつけたのです。谷山先生は私の問いに一つ一つ明快に答えてくれました。

先輩教師の言葉

次代を担う人が育っていく場をつくりたかった

宮崎県立都城商業高校校長
TANIYAMA TATSUHIRO 谷山達博

柳井先生の第一印象は「生意気」。留学経験があり、体はでかいし、おまけにイケメン。気に入らないですよね。でも彼らに頑張ってもらわないと、宮崎県の英語教育の未来がない。そう思っていました。

宮崎大宮高校のような進学校に赴任すれば、誰だってビビるものです。私も初めて進学校に赴任したときはそうでした。新任であればなおさらです。だから、柳井先生が着任したときも、食事に連れ出して、話をしたのです。かつての自分と同じような思いをしないで済むよう、不安を取り除いてあげたかったんです。分からないことがあったら何でも気軽に聞いてもらえるような関係を、若い人との間に築こうと思っていました。

柳井先生は一生懸命やっていましたが、それが空回りしてい

撮影◎宮崎県立宮崎大宮高校にて

谷山先生に膝詰めで教わる日々が始まりました。先生の授業を何度も見学し、プリントを配るタイミングにも意味があることを知りました。雑談を織り交ぜながら、生徒の集中力を高めるその授業は、「生徒は勉強しなさいと言われればするもの」と思っていた私のそれとは全く別物でした。谷山先生の授業で気付いたこと、ほかの先生の授業で分かったことを一つ一つ谷山先生に話す毎日でした。

はっきり言って、当時の私は同僚の教師からも生徒からも、「ダメ教師」のらく印を押されていました。それなのに谷山先生は、英語科共通で使用するプリントや校内テストの問題を「あんたがやってみなさい」と私に作らせてくれました。プリントの出来が悪く、迷惑をかけるときもありましたが、それでも先生は「よくやった」と褒めてくれました。そしてそれが終わるとまた「柳井さんにやらせてみようや」と私にチャンスを与えてくれるのです。赴任3年目、希望していた3学年への持ち上がりが出来なかったとき、3年間の指導の流れが分かるようにと、谷山先生が「2単位だけでも、柳井さんに持たせてみよう」とほかの先生に働きかけてくれたこともあります。

だから4年目、やっと1年担任を任され、先生と同じ学年団になれたときは、谷山クラスに勝つことでこれまでの恩を返そうと心に誓いました。定期考査の平均点もやっと同じくらい取れるようになっていたはずです。

教師生活のスタートは、挫折と模索の連続でした。谷山先生と出会わなければ、私は教師を辞めていました。それほど苦しい日々でしたが、あの日々があったから教師としての在り方が定まったのも事実です。何事もうまくいかない自分に、それでも「よくやった」と励まし続けてくれた谷山先生に、指導の根幹を学ぶことが出来たからです。

実は赴任3年目、私はある生徒に答案を返しながら「よく出来るようになったね」と声を掛けたそうです。彼はその後、英語教師になり、「先生のあのひと言に出会ったから、教師を志した」と私に話してくれました。そんな何気ないひと言で？　と正直驚きました。ただ、谷山先生に出会わなければ、私は「こんな点数じゃダメだ」と非難しながら返していたでしょう。谷山先生に褒められ、救われたから、私も生徒を褒めることが出来るようになったのです。

今、私が教師でいられるのは、谷山先生と出会えたからです。たのも事実です。ベテラン教師の授業を真似してなかなかうまくいかない彼に、「全部真似してもダメだよ。3割は自分の色を出して仕上げていかないと」と何度も説明しました。

プリントや作問を任せたのは、それで柳井先生が伸びるからです。宮崎大宮高校が県内で初めて65分授業を採用したときも、私は研究授業を柳井先生にやってもらおうと英語科で提案しました。授業をたくさんの先生に見てもらい、アドバイスを受けることで更に大きく伸びてほしかったのです。だから、色々な場を柳井先生に提供してきたつもりです。

柳井先生は最初の数年間はとても苦しんだようですが、それでも1年ごとにすごく成長していきました。悩んだ分だけ確実に育っていたんです。だから私は「よくやった」と柳井先生を褒めたのです。今では宮崎県の次代の教育を担う教師の一人になりました。

今の若い世代の先生方には、若さと自分らしさをもっとむき出しにしてもらいたいですね。そして、パソコンを閉じて、その分ほかの先生と語り合ってほしい。多くの悩みや疑問は、教師同士の対話の中で解決するべきものなのですから。

右 たにやま・たつひろ　英語科。宮崎南高校、高千穂高校を経て、宮崎大宮高校に。同校の教壇で10年間指導する。その後、延岡西高校教頭などを経て、現在、都城商業高校校長を務める。

左 やない・けんじ　英語科。初任の宮崎大宮高校に7年間勤務。その後、延岡高校に9年間務め、現在、延岡星雲高校で2年目を迎える。